

ネーション大学とのジョイント・シンポジウム報告

中安 文男^{*1}, 木川 剛志^{*2}, 西尾 浩一^{*2}, 藤原 明広^{*3},

桑原 芳枝^{*2}, 高頭 昂大^{*2}, 窪田 茜^{*2}, 橋爪 真未^{*1}

Joint Symposium between Fukui University of Technology and Nation University

Fumio NAKAYASU^{*1}, Tsuyoshi KIGAWA^{*2}, Koichi NISHIO^{*2}, Akihiro FUJIWARA^{*3},
Yoshie KUWABARA^{*2}, Takahiro TAKATOU^{*2}, Akane KUBOTA^{*2}, Mami HASHIZUME^{*1}

^{*1} International Center

The first joint symposium of both university, Fukui University of Technology and Nation University, was held on December 13th and 14th 2014 at the Lampang School of Nation University in Thailand. The joint symposium participants are Tanin Lampang Governor, Suchichai Nation Multimedia Group CEO, Pongin Nation University President, Nation University faculties and Nation University students from Thailand side and Matsuura Director of ASEAN office, Natsulee ASEAN office administrative staff, Horita Assistant Secretary General, Nakayasu Head of International Center, Hashizume Chief of International Center, Nishio Associate Professor, Kigawa Associate Professor, Fujiwara Associate Professor, a grad student and two students of Department of Design from Japan side. This joint symposium was published in Thai English-language newspaper "NATION" on the December 15.

Key Words : Joint Symposium, Nation University, Lampang, Thai Kingdom.

1. 緒 言

平成26年12月13, 14日の両日, タイ王国ランパーン市のNation大学ランパーン校において, 本学とNation大学の第一回ジョイント・シンポジウムが開催された. ジョイント・シンポジウムには, タイ王国側から, Taninランパーン県知事, Suchichai Nation マルチメディアグループCEO, Pongin Nation大学学長, Nation大学教職員, Nation大学学生が参加し, 日本側は, 松浦アセアン事務所長, ネスリーアセアン事務職員, 堀田事務局次長, 中安インターナショナルセンター長, 橋爪インターナショナルセンター主任, 西尾准教授, 木川准教授, 藤原准教授及び大学院生1名とデザイン学科学生2名が参加した. このジョイント・シンポジウムについては, 12月15日付けのタイの英字紙「NATION」に掲載された.

2. ジョイント・シンポジウム概要

ジョイント・シンポジウムには, Nation大学教員・学生, ランパーン地区住民, 本学教員・学生を含め, 約150名の参加があり, 13日午前には, Pongin Nation大学長, 中安インターナショナルセンター長, Suchichai NationマルチメディアグループCEO及びTanin ランパーン県知事のキーノートスピーチに引き続き, 本学藤原准教授の講演, 木川准教授とNation大学教員の講演 (Short Film) があった. [Fig.1]

13日午後には, 本学西尾准教授及び本学学生 (3名) とNation大学教員, Nation大学学生及びランパーン地区お坊さまで, 福井-ランパーン両地区の特産品 (越前和紙-ランパーンコットン) を用いたワークショップ

* 原稿受付 2015年2月27日

^{*1} インターナショナルセンター

^{*2} デザイン学科

^{*3} 経営情報学科

E-mail: nakayasu@fukui-ut.ac.jp

が開催され、並行していくつかのセッションが開かれた。その内の一つとして、本学教職員によるランパーン地区高校生への「日本留学説明会」が開催された。

3. ジョイント・シンポジウム

3.1 ジョイント・シンポジウム スケジュール

Saturday, 13 December 2014

9:00-9:30

歓迎のあいさつ—Asst. Prof. Dr. Pong-In Rakariyatham Nation大学学長

開会のあいさつ—Mr. Suthichai Yoon Nationグループ会長, 中安文男 インターナショナルセンター長 (原子力技術応用工学科教授)

9:30-10:00

「いつでもどこでもつながるためのネットワーク・デザイン: 遅延耐性ネットワークの紹介」

藤原明広 経営情報学科准教授

10:05-10:30

「地方発映画が見出す地方の魅力」

木川剛志 デザイン学科准教授

13:15-16:00

学生交流ワークショップ「素材と文化」

西尾浩一 デザイン学科准教授、本学学生3名

Sunday, 14 December 2014

9:00-9:45

日本の和紙についての説明&cotton素材を使用し、デザインした製品の紹介

西尾浩一 デザイン学科准教授、本学学生3名

11:15-11:45

パネルディスカッション「伝統的な素材と文化について」

Mr. Thongtorn Jaimon Community Development Academic

Mr. Nakorn Yothawong, Pra Uthai Ariyawangso, 西尾浩一 デザイン学科准教授

3.2 Network Design for Connecting Anytime Anywhere: An Introduction to Delay Tolerant Network

ジョイント・シンポジウム最初の講演として、「遅延耐性ネットワーク (Delay Tolerant Network(DTN))」を紹介した。以下では、講演内容に関してまとめたものを解説する。

近年のインターネット技術の急速な発展と爆発的な普及にも関わらず、インターネットに接続できない地域がある。例えば、宇宙、水中、山間部、災害時等の場所や状況においては、インターネットの接続が切断されたり崩壊したりすることが頻繁に起こりうる。このような環境のことを劣通信環境と呼ぶ。劣通信環境においてもインターネットに接続し、有効な通信を行う次世代技術の一つとしてDTNが提案されている。DTNは現在インターネットで使用されているTCP/IPプロトコルの開発者の一人であり、Googleの副社長かつChief Internet Evangelistとして有名なVint Cerf氏によって、宇宙空間で惑星間通信を行うために考案された。宇宙空間では、惑星間の距離が長いことによって、光速で電磁波を送っても通信にかかる遅延時間が無視できない長さになる。また、長距離による電磁波の減衰によって、直接的に通信ができない領域も存在する。このような通信に関する遅延や切断を解決するために、DTNではバンドル・プロトコルが考案された。バンドル・プロトコルでは、バンドル層という階層を設けて、そこで転送されてきた情報を一時的に蓄積する。このバンドル層に蓄積された情報を遅延や切断の問題が解決されて通信可能になった段階でパケットリレーのように伝える。従来のインターネットにおけるプロトコルは、送信者と受信者の間 (エンド・ツー・エンド) を直接的に結んで、サーバ間で情報転送しながら通信を行う。これでは途中で遅延や切断が起こった場合に転送した情報を再送する必要がある。この再送を不要とするのがバンドル・プロトコルの役割である。従って、バンドル・プロトコルは既存のTCP/IPプロトコルの拡張概念とも捉えることができる。DTNはNASA

が惑星間通信や衛星と惑星の表面との間での通信を行うために考案された。これらは既に宇宙空間で実証実験が行われており、実用化に向けて着実に技術開発が進行している。一方、DTNが認知されて以来、DTNの技術は宇宙以外の劣通信環境における応用も視野に入れた研究が行われてきた。例えば、海中をモニタリングするためのUnderwater Sensor Networkが沢山のグループによって研究されている。また、日本では東日本大震災以来、災害時に有効な通信技術として遅延耐性ネットワークを利用した情報通信ネットワーク技術の研究開発が活発に行われてきた。例えば、NICTによるNerveNetや東北大学のスマホdeリレーが挙げられる。また、私の研究グループでは遅延耐性ネットワークの一つの形であるすれちがい通信を利用した災害時避難誘導を提案し、数値シミュレーションにより避難時間の短縮ができることを示した。遅延耐性ネットワークに関する技術が発展することにより、インターネットに接続することが選択できる時空間的領域が拡大されていくことが今後も期待できる。

3.3 ショートフィルムをつかった街の魅力創出

日本で開催されている短編映画祭などでも、この数年、タイからのショートフィルムが上位にノミネートし、その評価は年々高まっている。そのタイでメディア系の学部を持つNation大学との共同シンポジウムとのことで、学内公募に「ショートフィルムを用いた地方都市の潜在的魅力の抽出」のタイトルで応募したところ、Nation大学の意向もあり、選ばれた。Nation大学の方の映像部門の担当は Communication Art学部の Champathong副学部長であった。[Fig.2]

このシンポジウムの背景には、この最近の日本映画の傾向がある。かつて地方都市を舞台とした映画は松竹の「男はつらいよ」や「釣りバカ日誌」のように、地方ならではの“人情”や“風光明媚な景色”に焦点がおかれていた。これはいわば東京から見た地方の姿である。ところがこの五年の間に地方都市では多くの映画が撮られるようになったが、それらは東京にはないコンテンツ、その地方独自の歴史や文化が重要な対象となり、地方の人たちだけで共有された事象が、全国的にも興味の対象となる、このような形で映画が生まれている。つまり、今は、東京からみた“福井”ではなく、東京にはない“福井”が重要視されている。そして、今回共同開催する大学の所在地もLampang.BangkokにはないLampangとはなんだろうか？それがこのシンポジウムの議論であった。シンポジウムでは、私がプロデューサーをつとめた映画「カタラズのまちで」を紹介した。この映画は2012年に、福井出身の俳優、津田寛治を監督として起用した映画で、市民から撮影費を集める、いわゆるクラウドファンディングで製作した映画である。津田寛治が、福井でどのように感じて、東京に俳優になるために旅立ったのか。それを自伝的に語る映画でもあった。これは福井でしか撮れない話である。

今回のシンポジウムでは、Lampang在住の監督たちが、英語が全く話せないこともあり、なかなか十分な議論を行えたとはいえないが、シンポジウム後、福井とLampangを舞台としたショートフィルムが撮れないか、との提案もあった。現在は、その映画プロットを執筆中である。国際的なつながりから生まれることも見えてきた、意味のあるシンポジウムであった。



Fig.1 The opening ceremony



Fig.2 Short films of local towns attentions on "The Charm of Two Cities"

4. 学生交流ワークショップ「素材と文化」

デザインの分野において、学生を中心とした2か国のチームを編成し、デザイン作品の制作を行った。タイと日本は、それぞれの伝統的な素材を交換し、他国の文化・伝統が集積された素材を用いて制作を行うことにより、お互いの文化を学び合う。最終的にジョイント・シンポジウムに成果物を持ち寄りワークショップとプレゼンテーションを行った。

4.1 デザインプロセス

以下のプロセスを経てデザインを行った。

(1) 学生チームの編成

学生チーム選抜のため、学科内コンペを行った。アイデア展開力、プレゼンテーション力を審査し、学生3名（修士1年：桑原芳枝、学科2年：高頭昂大、窪田茜）を選抜した。

(2) 発想方針の検討

デザインを行う上で基盤となる発想の方針について検討を行い、2つの考え方をまとめ、FUT学生グループによるデザインを進めた。

- Object based thinking.

提供された素材が持つ特性と福井の特色である加工技術をいかに活用するのかを視点に発想する。

- Culture based thinking.

タイと日本の文化の違い、文化の融合を視点に発想する。

(3) 伝統素材の交換

本学からネイション大学チームへは越前和紙（人間国宝岩野市兵衛作、サイズ：900×600、原料：楮100% 20枚）を提供し、ネイション大学からはランパーン県特産のPhasin（織物、コットン100%、天然染色、900×3000 1枚）が送られた。

(4) 素材についての情報交換

越前和紙の製法をネイション大学チームに紹介するため、学生2名が「越前和紙の里」を取材し職人から紙漉きについて話を聞き、映像を制作しネイション大学チームへ送付した。翻訳には、本学基盤教育機構のクリフトン・デイビス氏の協力を得た。

4.2 制作した作品

Phasinの日傘

Phasinは手触りもよく、少し厚めで丈夫であった。福井県の特徴的な素材や技術を調べ、Phasinの良さを引き立てるコラボレーションを探った。特色ある技術をもち世界的にも有名な高級傘メーカー「株式会社福井洋傘」の協力を得て、日傘のデザインを行うこととなった。制作には、本学デザイン学科OBの製品開発部中路翔馬氏の協力を得た。シンプルなストライプのPhasinを縦目柄で使い、すっきりとした風合いを持たせた[Fig.3]。持ち手部分はPhasinの色合いとの調和と日本的なイメージを持つ「ヒノキ」を素材とした。「手のひら」をモチーフに使用者と傘が握手を交わす状態を演出し「晴れた日は、いつもいっしょ。」というメッセージを持たせた。「手のひら」のカタチをデフォルメするため、タイでも人気がある「ドラえもん」の手をヒントにシンプルな形状とした。[Fig.4]

ささやかな贈り物用パッケージ「結—Yui—」

タイと日本の文化の相違点を調べグループで議論した。タイでは人前で怒ることはよくないこととされており、「マイペンライ：気にしないで。」という言葉に象徴される非常に穏やかな人間関係形成の文化を持つ。そこで、日本における人間関係の形成にはどのような特徴があるのかを議論していったところ、日本では「贈り物」が特徴的な文化ではないかという考えに至った。「マイペンライの概念」と「贈り物のしつらえ」を融合したデザインをコンセプトに進めることとした。結果として、オフィス環境において、ささやかな贈り物（飴やチョコレート）を頻繁に贈り合い「マイペンライ」と言葉を交わしながら穏やかな人間関係が形成されていくという「できごと」のデザインとなった。

アウトプットとして、ささやかな贈り物をするための「しつらえ」である小さなパッケージをPhasinを用

いて制作した。形状は変形4角形とし、贈り物を包んだ状態で美しく佇むよう設計した[Fig.5]。また取り付けられた組紐を結び、結び目を表に出すことで水引の要素を取り入れた。結は使い捨てのパッケージではなく受け取った人は何か別のものを包み他の人に贈るといった「循環するパッケージ」という概念の提案でもあった。さらに、結は「できごと」のデザインであるため、結がオフィスにあることによって生じる「できごと」を映像作品「A office in Japan」として制作することにした。撮影には本学庶務課の協力を頂いた。[Fig.6]



Fig.3 Parasol made by Phasim



Fig.4 Grip of the parasol



Fig.5 Yui



Fig.6 The video for Yui

4.3 学生交流ワークショップ「素材と文化」

ネイション大学にて学生交流ワークショップ「素材と文化」を開催した。

4.3.1 プレゼンテーション「越前和紙について」

FUT学生チーム制作の「越前和紙の里」取材記録を上映し、和紙ができるまでの映像と合わせて解説を行った。製造過程で糊として使用される「とろろ葵」について関心が寄せられた。

4.3.2 プレゼンテーション「Phasinについて」

ネイション大学学生チームより、Phasinの製造過程のスライドショウが上映された。すべてタイ語であつ

たが、多くの写真によって製造過程が想像できた。

4.3.3 デザイン成果発表

・ネイション大学学生チーム

ネイション大学学生チームおよび僧Pra Uthai Ariyawangso氏から和紙を取り入れた器（寺院でお供えをする時に使用）のプレゼンテーションが行われた。これまで森林保護のため竹を使用した器づくりをPra Uthai Ariyawangso氏は提案してきたとのこと。ネイション大学学生チームは、器制作のため5日間寺院に寝泊まりしPra Uthai Ariyawangso氏指導の下、器を制作。竹ひごと竹ひごの間に和紙を挟むことで強度を向上できたとの報告であった。形態の成立ちについては仏教の教えが基となっており、伝統的なカタチと製造方法のように思われたが、新しく考え出された器であった。伝統に縛られることなく、地域の寺院が中心となって「モノづくり」が行われるという文化に非常に驚かされた。

・FUT学生チーム

FUT学生チームからは、「Phasinの日傘」と「結—Yui—」についてプレゼンテーションを行った。日傘は参加者ひとりひとりが手に持ち、色合いや持ち手の感触とヒノキの香りを体験した。「結—Yui—」については、風呂敷や水引といった日本の贈り物のしつらえについて説明をした後、制作した映像「A office in Japan」を上映した。お土産として持ってきたお菓子をYuiに包み参加者に贈る実演を行いながら使用方法を説明した。作品を手に取りながら両チームとも非常に和やかに交流することができた。

4.3.4 器づくり体験

Pra Uthai Ariyawangso氏から器の作り方の説明を受けた後、参加者が器をつくる作業を行った。竹ひごと和紙の短冊を重ね合せ器のカタチを形成した。手作業を通して作り方を教え合うなど学生間の交流も生まれ有意義であった。[Fig.7]

4.4 シンポジウムにおけるプレゼンテーション「Design and Use of Local Materials」

ジョイント・シンポジウムにおいてワークショップと同様、2校の教員・学生によってPhasinと越前和紙の説明が行われた。次にそれぞれの成果物について発表を行った。FUT学生チームの発表では、Suthichai Yoon会長ならびにPong-In Rakariyatham 学長へYuiを贈るデモンストレーションが行われ和やかなプレゼンテーションとなった。[Fig.7]

4.5 パネルディスカッション

Nakorn Yothawong氏、西尾浩一、Pra Uthai Ariyawangso氏、Mr. Thongtorn Jaimon氏によるパネルディスカッションが行われた。僧Pra Uthai Ariyawangso氏によると参拝者は必ずお供え物をしてくださるので、僧が中心となって新しいモノづくりの提案を行うことで、周辺地域の人々の仕事や収入を増やし貢献してゆきたいという考えがあり、今後も越前和紙を用いて質の高い器を作りたいとの希望が伝えられた。天然の素材のみを使用した器には魅力があり、和紙だけでなく漆による仕上げについても検討いただければと提案した。大学院で研究をしながらセラミック会社を営むNakorn Yothawong氏より日傘の持ち手をランパーンの焼き物で作ってみるなど協働できることを見つけてゆきたいとの意見を頂いた。非常に建設的な今後の交流・協同のあり方を具体化できた。[Fig.7]

4.6 学生交流ワークショップを通して

FUT学生チームによるデザインは、素材特性と福井の地域産業が持つ加工技術の融合や文化の相違から発想を行い、「考え方」を見つけてゆくプロセスをとった。一方、ネイション大学学生チームの取り組みは、寺院を中心にお坊さまの指導の下に制作を行った。いわゆる正攻法ではあるが、商用性が見え隠れする私たちのデザイン思考とは全く異なり、風習や風土と生活の基本である宗教から発生した「モノづくり」は「人がモノをつくる。」という根源的な意味について大いに考えさせられるものであった。

ワークショップを通して学生たちも活発な交流を行うことができた。言葉を超えて作品を通して通じ合え

る貴重な経験となった。シンポジウム後、Nakorn Yothawong氏は「越前焼き」の研究を始められたとのことで、今後の交流の芽が吹き始めている。



Fig.7 Workshop, presentation and panel discussion

5. 今後の予定

ジョイント・シンポジウム期間中に、Suchichai Nation メディアグループCEO, Pongin Nation大学長などと、今後の協力関係について協議を行なった。その結果、本学とNation大学との学生交流を積極的に進めていくこととした。なお、さくらサイエンスへのNation大学生の応募については、ランパーン地区の高校生も同伴可能かどうか検討することとした。本学とNation大学との間で、双方の地域と連携した共同研究の可能性の検討を行うこととした。例えば、双方の地域で特徴的な製品、越前焼とランパーン陶器、越前和紙とランパーン紙、越前竹細工とランパーン竹細工、及びこれらの複合が候補として挙げられた。今回のジョイント・シンポジウムで公開され好評であったランパーン竹と越前和紙の組み合わせ(竹のみでは柔軟性に欠けるが、竹の間にクッション材として越前和紙を挟むと良好な製品(供物台)ができることが、ランパーンのお坊さまにより示された。タイ王国では、お坊さまの仕事の一つに地域を豊かにするための製品開発があるとのことである)のような複合製品も視野に置いて、検討することとした。越前和紙の原料である「こうぞ」「みつまた」「がんび」及び「とろろあおい」をランパーンで栽培し、これを用いたランパーン和紙制作の可能性についても検討することとした。

ショートフィルムについても、今回は、本学とNation大学が別に制作して、ジョイント・シンポジウムで発表したが、次回、これを共同制作できないかについても検討することとした。原子力に関する国際コンファレンスを、タイで開催したらどうかとの提案があり、開催する場合、Nationグループが協力できるとの提案が、Suchichai CEOからあった。第2回ジョイント・シンポジウムは、本学で、2015年中旬を目処に開催することとしている。

謝 辞

本シンポジウムの開催にあたり、ご支援・ご指導・ご助言をいただいた、学校法人金井学園 金井理事長、松浦理事、福井工業大学 森島学長、鈴木副学長、佐野事務局長、池田学長補佐、松岡経営情報学科主任、川島デザイン学科主任及びご協力いただいた福井工業大学教職員の皆様方に深く感謝します。

(平成 27 年 3 月 31 日受理)